郷土館の刊行物

　※遠方の方には郵送も可能です。送料が別途かかりますので、館までお問い合わせください。TEL 0125-43-2131　（担当在館：水曜日～日曜日　10:00 ～ 17:00 ※年末年始除く）

■　豆本・ブックレット　　各 100 円(税込)

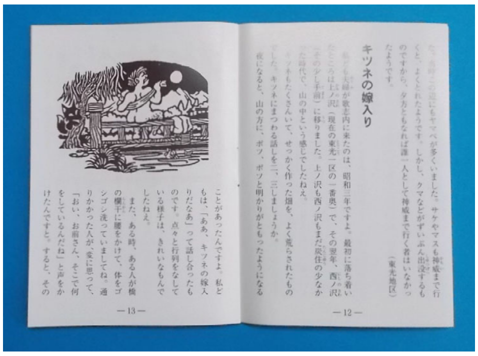
〈豆本〉

歌志内のむかしばなしシリーズ

1997（平成９）年刊　28 ページ　サイズ：A7（約 73 × 104mm）

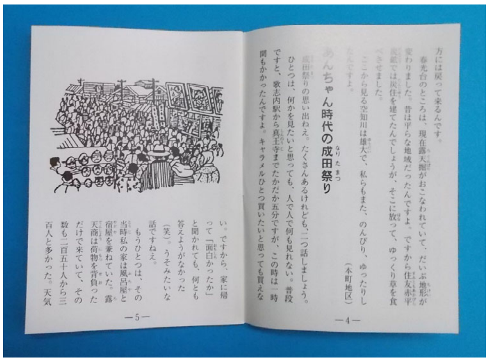
歌志内歴史収集･保存会（当時）発行の同シリーズを再編集し、豆本化。

第一集　動物編



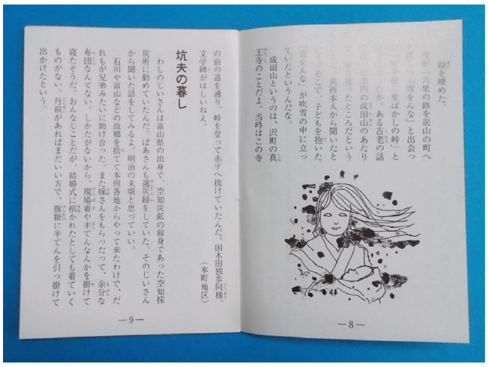
キツネの嫁入り・白ヘビ騒動と鎮火祭・クマととっくみあいほか、動物にまつわる 10 話を収録。飼っていたヘビが竜になったなど、昭和の初め頃の迷信とも現実ともつかない不思議な話を掲載。

第二集　大正・昭和初期編



あんちゃん時代の成田まつり・ズリ山のこと・なっとう売りほか、まちのにぎわいや、生活に関する 12 話を収録。自然発火したズリ山のわき水で「温泉」ができたなど、当時の人々の息づかいが伝わる。

第三集　歴史文化編


殿を埋めた。
殿が「六里の路を炭山の町へ
「雪をんな」と出会っ
里ばかしの峠」と
か。ある古老の話
歌志内の成田山のあたり
を登ったところだという
葛西本人から聞いたと
そこで、子どもを抱いた
「雪をんな」が吹雪の中に立っ
ていたというんだな。
成田山というのは、沢町の真
王寺のことだよ。当時はこの寺
—8—

の前の道を通り、峠を登って赤平へ抜けていたんだ。国木田独歩同様、
文学碑がほしいねえ。
（本町地区）

坑夫の暮し

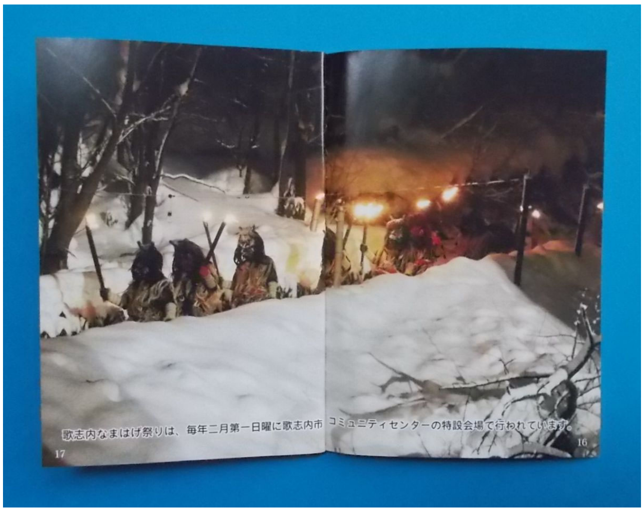
わしのじいさんは富山県の出身で、空知炭鉱の前身であった空知採
炭所に勤めていたんだ。ばあさんも選炭婦をしていた。そのじいさん
から聞いた話をしてみるよ。明治の末頃と思っていい。
石川や富山などの故郷を捨てて本州各地からやって来たわけで、だ
れもが兄弟みたいに助け合った。また嫁さんをもらったって、余分な
布団なんてない。しかたがないから、現場着や半てんなんかを掛けて
寝たそうだ。おんなじことだが、結婚式に招かれたとしても着ていく
ものがない。丹前があればまだいい方で、腹掛に半てんを引っ掛けて
出かけたという。
—9—

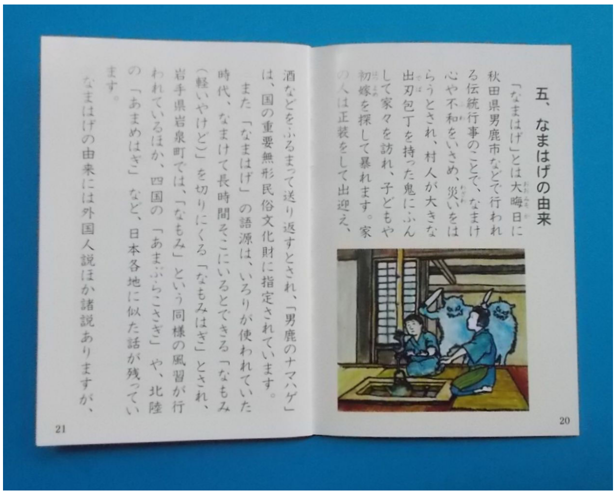
国木田独歩の描いた歌志内、渡友子の墓、早坂文雄のこと、オリンピック大会で活躍した歌志内出身者など、ゆかりの人々に関する 14 話を収録。峠に子どもを抱いた雪女が立っていたという、明治の作家　葛西善蔵の『雪をんな』の話は、ファンタジック。

〈豆本〉

歌志内　なまはげ伝説

2016（平成 28）年刊　28 ページ　サイズ：A7（約 74 × 105mm）





五、なまはげの由来

「なまはげ」とは大晦日に秋田県男鹿市などで行われる伝統行事のことで、なまけ心や不和をいさめ、災いをはらうとされ、村人が大きな出刃包丁を持った鬼にふんして家々を訪れ、子どもや初嫁を探して暴れます。家の人は正装をして出迎え、

20

酒などをふるまって送り返すとされ、「男鹿のナマハゲ」は、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

また「なまはげ」の語源は、いろりが使われていた時代、なまけて長時間そこにいるとできる「なもみ（軽いやけど）」を切りにくる「なもみはぎ」とされ、岩手県岩泉町では、「なもみ」という同様の風習が行われているほか、四国の「あまぶらこさぎ」や、北陸の「あまめはぎ」など、日本各地に似た話が残っています。

なまはげの由来には外国人説ほか諸説ありますが、

21

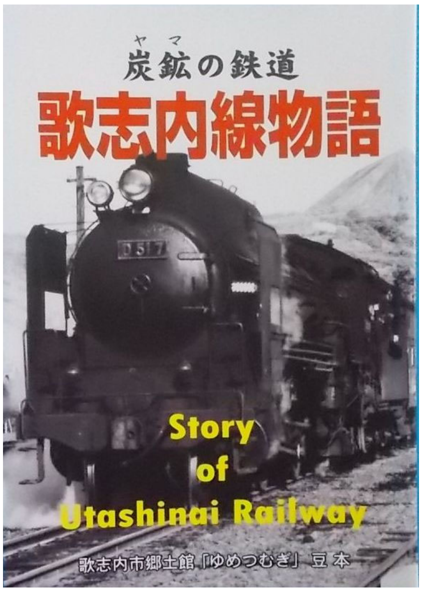
三十年前、炭鉱の縮小で、まちを離れる家族が増える中、意気消沈する子どもたちを元気づけようと、親たちが立ち上がった。

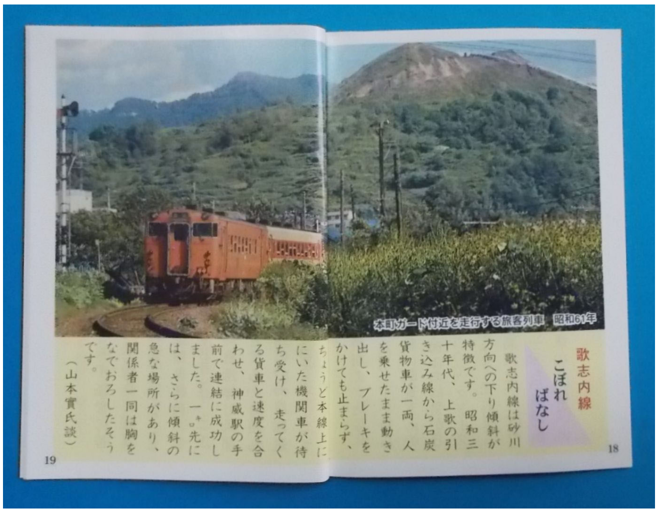
本場秋田・男鹿の観光協会にかけあって借りた２体の面から「伝説」は始まった。

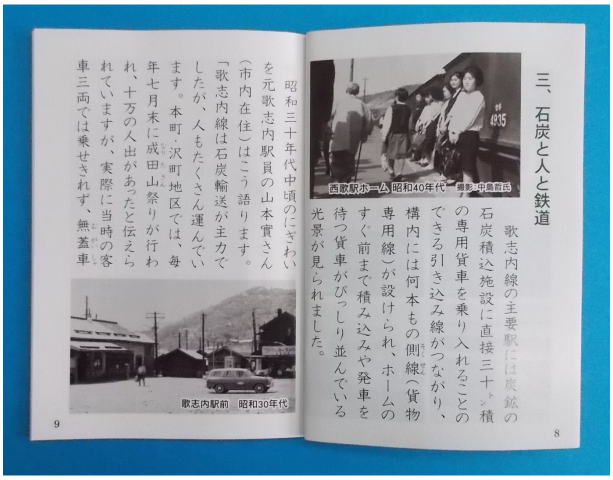
歌志内の「なまはげ」のルーツほか、その由来を紹介。

炭鉱（ヤマ）の鉄道　歌志内線物語

2017（平成 29）年刊　 28 ページ　サイズ：A7（約 74 × 105mm）





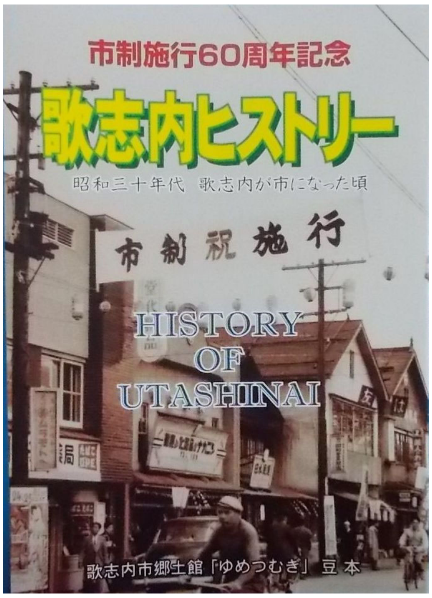


1891（明治 24）年、歌志内の石炭を大量輸送するため、幌内鉄道に次いで、道内２番目に開業。以後、まちの大動脈として、物流や人の往来を 97 年間担ってきた歌志内線の盛衰をわかりやすく紹介。

各駅名の由来ほか、黒字路線だった時代の話、さよなら列車運行時のエピソードなど、関係者の貴重な証言を収録。

市制施行 60 周年記念　歌志内ヒストリー　昭和三十年代　歌志内が市になった頃

2018（平成 30）年刊　　28 ページ　　サイズ：A7（約 74 × 105mm）



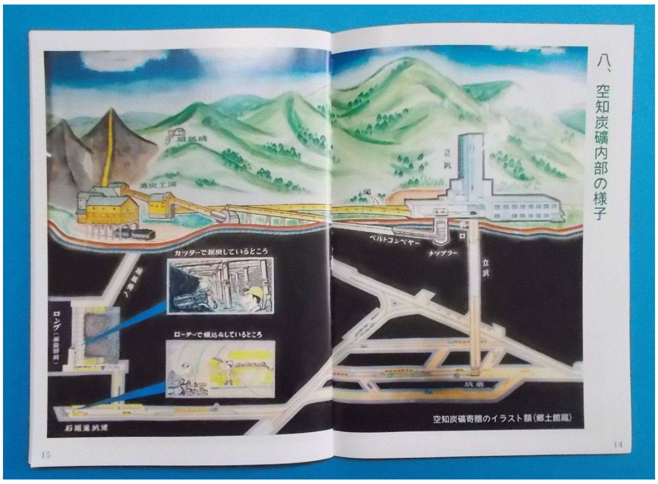
石炭のまちとして誕生し、1958（昭和33）年、道内 27 番目の市に成長した歌志内。

当時の活気ある街並写真や、東京オリンピック出場者の話など、炭都として栄えた時代のエピソードを収録。裏表紙は、当時の市勢要覧に使われた、石炭を掘る炭鉱マン。

〈ブックレット〉　<u>※豆本の 2 倍サイズなので、表紙写真のみ、やや大きめに掲載</u>

歌志内　はじまりの炭鉱　北炭空知採炭所設置から空知炭礦閉山 105 年の歴史

2020（令和 2）年刊　28 ページ　サイズ：A6（約 105 × 148mm）



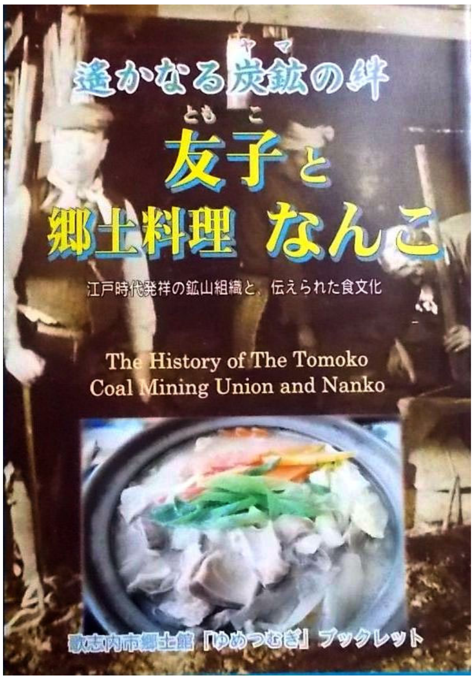
1890（明治 23）年、北海道空知地方の最初の炭鉱として開かれ、1993（平成 5）年、最後の閉山となった「空知炭礦」。

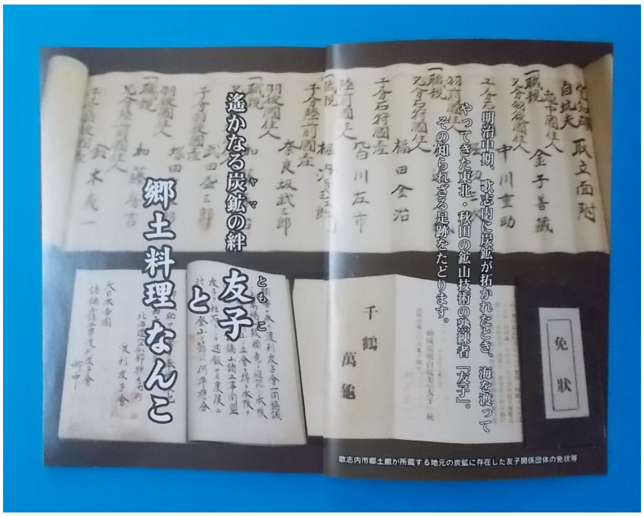
石炭は何のために掘られたのかや、炭鉱の仕事、まちのにぎわい、閉山に至る状況などを簡潔に紹介。

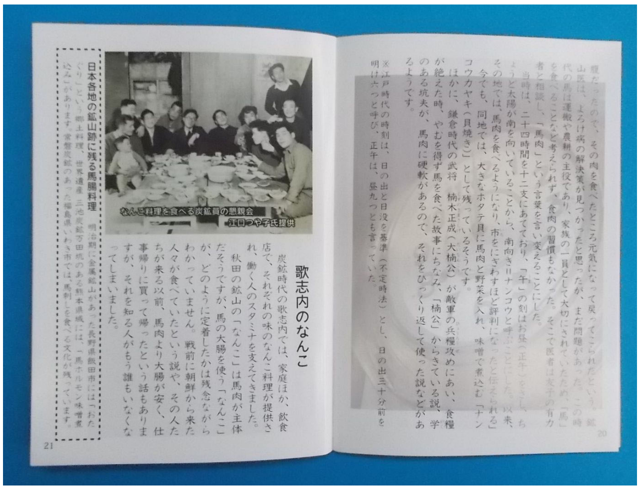
坑内事故から生還した奇跡のエピソードも収録。

遙かなる炭鉱（ヤマ）の絆　友子（ともこ）と郷土料理 なんこ　江戸時代発祥の鉱山組織と、伝えられた食文化

2020（令和 4）年刊　26 ページ　サイズ：A6（約 104 × 148mm）





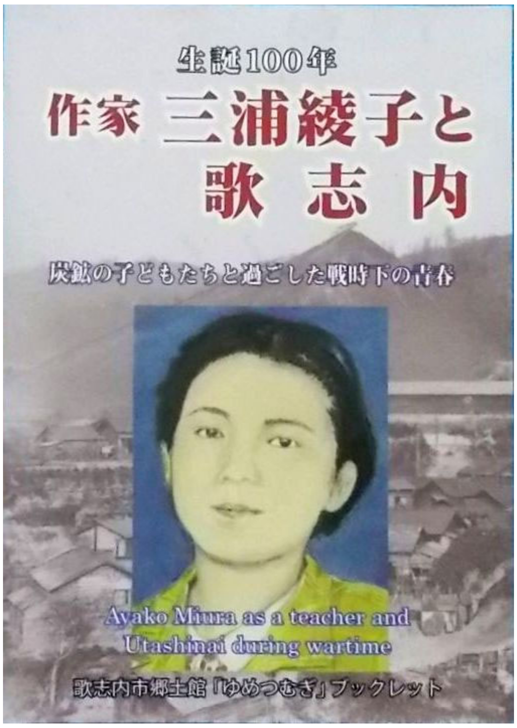


江戸時代の鉱山で発祥し、明治期に北海道の炭鉱に渡った職能集団「友子」の人々。

今に伝わる資料から、徳川家康が許可したとされる成り立ちや、親分子分の関係、おきて、誇り高い仕事意識など、知られざる実態をまとめたほか、彼らによってもたらされ、今では歌志内の郷土料理となった「なんこ」との深い関わりを紹介。

生誕 100 年　作家 三浦綾子と歌志内　炭鉱の子どもたちと過ごした戦時下の青春

2023（令和 5）年刊　 28 ページ　サイズ：A6（約 106 × 149mm）



1939（昭和 14）年、16 才の少女 堀田綾子（のちの三浦綾子）が、初めて赴任することになった歌志内の神威小学校は、軍国教育の最先端をいっていた。

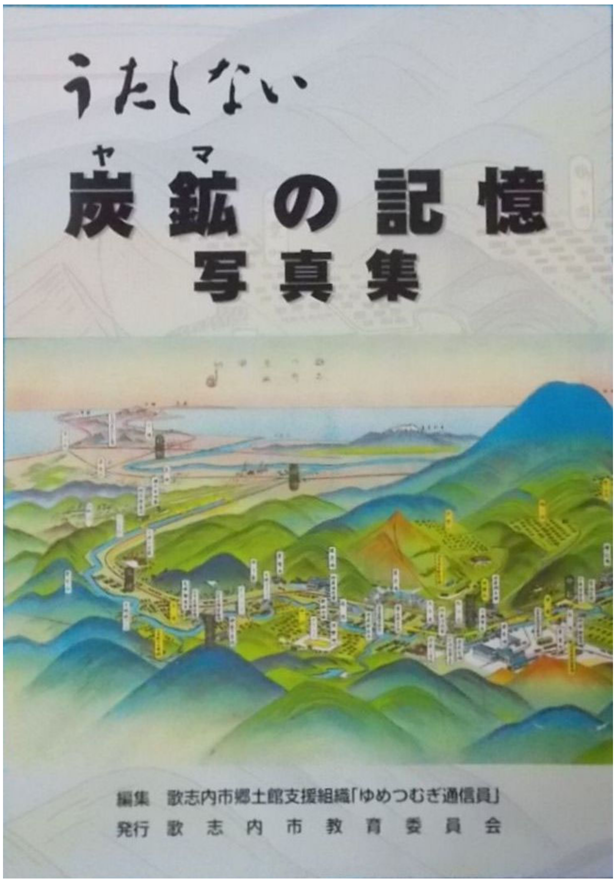
作品世界に大きな影響を与え、最後の長編「銃口」に色濃く反映された歌志内時代を、作家本人の寄稿文や、写真、当時の辞令簿など、希少資料により紹介。

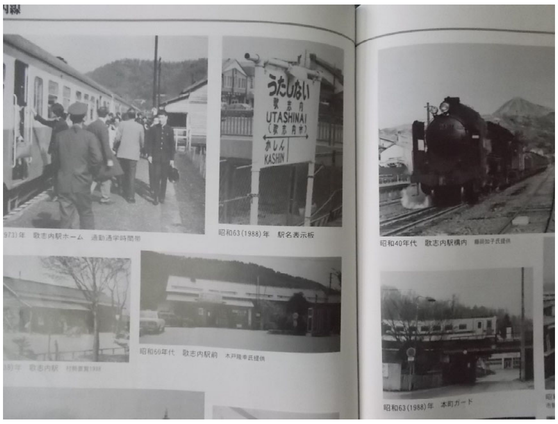
2022（令和 4）年の生誕 100 年にちなみ刊行。

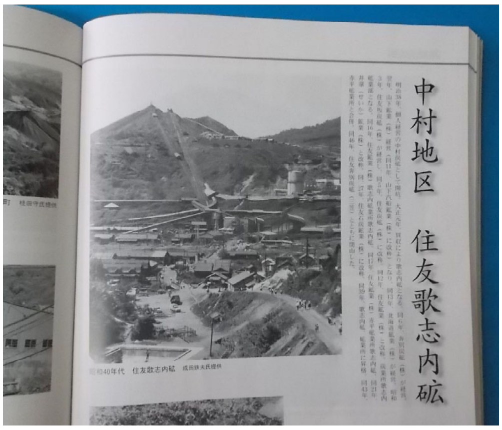
■　写真集　　1,000 円（税込）

うたしない　炭鉱（ヤマ）の記憶真集　2019（令和元）年刊　　160 ページ

サイズ：A4（約 210 × 298mm）







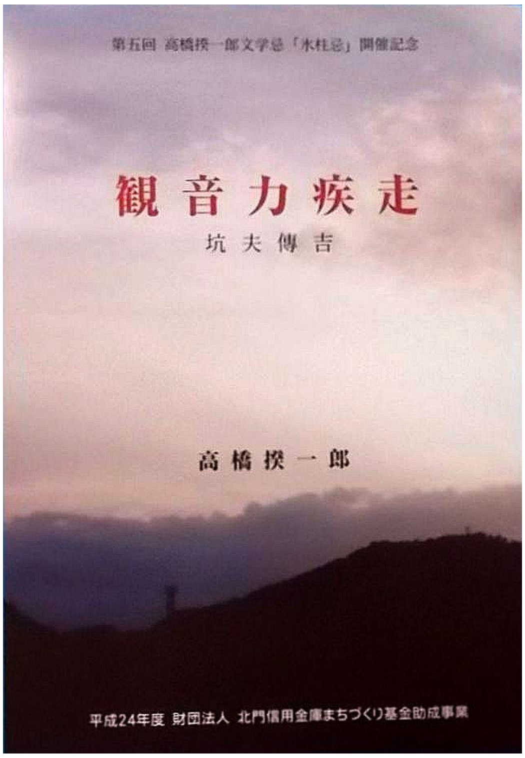
歌志内市郷土館支援組織「ゆめつむぎ通信員」が制作した旧版を増補し、復刻。

まちの人々から集めた写真を中心に、市勢要覧、パンフレット類ほか記録写真を加え、昭和 30 年代頃のにぎわい、各地区の様子、学校、まつりほか、思い出話を収録。

歌志内の市井の人々の視点から、炭鉱で栄えた時代を振り返る写真集。

■　その他の出版物

第５回　高橋揆一郎文学忌「氷柱忌」開催記念　観音力疾走　坑夫傳吉　　500 円(税込)
2013(平成 25) 年刊　156 ページ　　サイズ：A6(約 106 × 148mm)
発行　歌志内市郷土館支援組織「ゆめつむぎ通信員」



郷土館ボランティア団体が、地元出身作家を偲ぶ文学忌 第 5 回「氷柱忌(つららき)」開催を記念し発行。
北海道新聞文学賞を受賞し、芥川賞候補ともなった作品「観音力疾走」の復刻と、遺族の協力による未発表の原型作品の公開に加え、ノンフィクション作家　合田一道の解説を添えた。作者によるイラスト 11 点も収録。

「観音力疾走」
夫に逃げられ、三人の子をかかえながら、炭鉱長屋でひっそりくらす「ふさ」は、あるきっかけで、乱暴者の坑夫「伝吉」と結ばれる。一緒に暮らすうち、その優しさに触れ、束の間の幸せを感じるが、障害を持つ子が突然亡くなったあと、伝吉も坑内事故で瀕死の重傷を負ってしまう。なすすべなく、観音経の一節を唱え続けるふさ。歌志内の炭鉱を舞台に人生の無常を描いた名作。巡回朗読会が行われたほどの人気を誇る。

「坑夫傳吉」※未発表
落盤事故で死んだ乱暴者の坑夫「傳吉」の葬式の場面から始まる。子どもの頃、母親に裏切られたことから、女性嫌いで、ひねくれてしまった傳吉だったが、薄幸な「ふさ」と出会ったことで、はじめて人のやさしさに触れる。しかし、障害を持つ連れ子の突然の死が影を落とし、やがて事故に遭ってしまう。炭鉱の人々の心情の裏も表も描き出すと同時に、母性への憧れを秘めた「観音力疾走」の原型作品。「観音力－」と併せ読むことで、その完成度と、作者が描こうとした世界を理解することができる。